

16. 石棺

弥生時代以来、遺体をおさめる容れ物として使われてきた木の棺とともに、古墳時代には木棺の形を真似て石で作った石棺が使われるようになりました。石棺は腐りやすい木棺に比べより永く遺体を保存できるとの思いがあったのでしょう。

まず4世紀に割竹形石棺という竹を縦に割って合わせたような割竹形木棺をまねた石棺が現れました。ごく少数しか見つかっていませんが、香川県の鷲ノ山(わしのやま)石や火山石と呼ばれる凝灰岩製のものを典型例とし、近畿地方でも見ついています。これに続いて舟形木棺をまねた舟形石棺も、各地の質の良い石材の産地付近で作られました。

4世紀後半には、近畿地方で長持形石棺が現れました。大王墓級の古墳から見つけることが多いので、「王者のひつぎ」とも呼ばれます。使われた石材は、ほとんどが兵庫県加古川流域の竜山石(たつやまいし)と呼ばれる凝灰岩です。ちなみに長持形という名前は、衣類などを納める長持に形が似ていることに由来します。

家形石棺は、九州から運ばれた阿蘇山の溶結凝灰岩で作られた舟形石棺をもとにして近畿地方で成立しました。家形石棺には、身も蓋も一石を割り抜いたものと、複数の石材を組み合わせたものがあり、6世紀以降各地で作られました。

ところで阿蘇山の溶結凝灰岩の石棺の一部は、近畿地方へ運ばれたことがわかっています。わざわざ遠隔地の石材を使うのは、葬られた人物とその地域との深い関係があったからなのでしょう。